荒沢勝太郎

1

おおよそ二万年前、谷に縄文時代の海進があり、そして後退があり、そのくり返えしのなかで、丘が削られ、谷が埋まるなどして今日の釧路湿原が、どうにか形を整えた。それは三千年前のことだという。

こういう話を聞くと、遠い地球の歴史へ思いを馳せながら幻想に溺れ易い私のような者は、びっくりするほどわくわくして、そこに自生している植物たちの素性をはっきりさせたいという探求心をふくらませてしまう。とはいっても、素人のこと、とてもそういう点にまで力の及ばないことははっきりしているから、湿原に咲く小さな花たちと勝手気ままな対話を楽しんで、事足りたような表情をする。気持のうえでも、対話という手段を通じて私の幻想性が満たされるから、至極御満悦なのである。このような態度はとかく第三者の嘲笑の的になることが多いし、ついにはあきれ果てて笑うことすら、忘れてしまうようである。このような姿勢で釧路湿原の花について語ることを、あらかじめ理解してほしいと思う。

2

釧路湿原の周縁は中間層湿原が主体となり、中央部と北部は低層、高層湿原が複雑に入り組んでいるから、興味深い。

植物たちの何千年来の遺骸の堆積による泥炭層とミズゴケやスギゴケを主体にしたブルトの波状的なひろがり、たっぷりと水を含んだ泥炭層と池沼の点在。湿原は植物の宝庫だといわれるが、その豊かな植物たちはところかまわず、どこにでも勝手に生えているわけではない。

たとえば池沼では、水面の上に花茎を突き出した花はネムロコウホネ。この黄緑色の花は手造りの漆ぬりの菓子盆を連想させる。水面に浮いた葉にのっかるように、白色の八―一五箇の花弁を和菓子のように咲かせているのはエゾノヒツジクサ。緑で水面を覆いつくすのはヒシ。長い緑の沈水葉を小さな水の流れにまかせているウメバチモ。径一五ミリの白い花はウメの花によく似ている。可憐ではあるが、きわめて強靱な印象を与えている。

ヒルムシロの浮水葉がおおっている小さな池沼には、コタヌキモが侵入していることもある。その岸辺に伸び悩んだノリウツギの低木が虚勢を張るように、意外に大きな花をもり上げ、しかも装飾花が自分の存在を無視するわけにはいかぬであろうといった姿で開き、昆虫を誘惑しようと懸命である。

深い湖沼ではササエビモやナガバノエビモが水中で茂っている。岸辺近くではヤリの穂先のような花軸をかこんだ剣状のガマの濃緑の葉が美事な生き方を見せている。これらの例でも理解できるように、さまざまの環境と条件のなかで、それぞれの植物が生きているのである。

つづけて、水辺の植物を追っていくと、少し浅くなるとフトイが弾力性のある姿態で茂り、水深一メートルに満たないところではミズスギナやオモダカ、エゾミクリなどが賑やかに緑の群をつくっている。こうした植物たちの緑は水との組み合せで、特に効果的で、鮮明に映えるのである。

水深二〇センチほどの岸辺ではミズトクサやミツガシワが繁茂し、それにクロバナロウゲの群落が、庇のように張り出している。ミツガシワの花は穂状に集まって下の方から咲いて季節を追っていく。ツボミのときには淡紅の口紅をひいたように婉である。開いた星形の五裂花は、裂片の内面にはレース編みの糸のような白毛が、手のこんだ飾りのようについている。それは精巧な手づくりの味である。三枚の厚味のある葉の緑のつややかさもよい。

クロバナロウゲの羽状複葉は奇数で互生する。表面は緑、裏面は青味をおびる。こ

釧路湿原の花

のテクニックは、小憎らしいとさえ思う。黒紫色の花は花弁がガク片よりも短いので奇型児的な印象を与える。

ミツガシワやクロバナロウゲは湖沼を岸辺から徐々に、それは驚くべき根気強さでしかも長い年月をかけて浅くし、ついには水位ゼロの湿原をつくってきた植物群の主体的役割を果たした。そして、これからもその役割を忠実に継続していくのである。

3

水位ゼロの湿原は池沼の水の影響をうけて栄養分があるので、キタヨシの優占群落を見ることが多い。この群落の中を膝小僧までぬかりながら、方向を失うのも構わずさまよい歩くのを私は楽しみにしている。体力的には確かに相当の消耗をともなうがそれは植物たちの歓迎で十分に補われるのである。

すでにミズゴケの堆積がみられるが、ブルトは明確につくられてはいない。ここでツルコケモモが長い茎をのばしている。ところみに引いてみると、三〇センチくらいは伸びていることがわかる。互生する小形の葉はかたくてつやがある。ヘリが内側にまくれている。これは自己防衛の姿勢なのであろう。

七月頃に咲く花は知的な素朴さをもつ小娘のようだ。淡紅色の花が四つに裂けて、アクロバットのように反転している。茎から突き出た二〜三本の花茎が、その花を捧げるような形で直立するのも、細やかな愛情の表現といってもよいだろう。

花の後の液果は小指の頭ほどの大きさで紅色に熟れる。甘味がある。私はこの塩漬けをオードブルにしてウオッカをのんだことがある。レニングラードのレストランだった。そのとき、はしなくも釧路湿原や、樺太の幌内凍土帯への回想に走ったのである。

このキタヨシ地帯にヒメカイウが生えている。ミズバショウを小さくしたような仏淡苞と花軸は、若い尼僧のようである。ミズザセン、ミズイモの別名がある。花は両性で上方が雄性だということである。北半球北部にただ一種だけである。ミズゴケに深く根茎を埋め白い仏淡苞が緑のミズゴケのベットにぬくぬくと身を横たえている。

そこに平穏な憩いの時と姿を見ることができる。自然はどこかでホッと息を抜くことを知っている。しかもその休らぎは造りごとではない、清々しさが感じられる。

ノハナショウブ、サワギキョウ、タチギボウシなどの中型草本が最近増えてきた。これらはキタヨシ群落が、やや勢力の衰えをみせる辺りに多い。サワギキョウは池沼の畔に群落をつくり、その外縁にノハナショウブが群落をつくっている。タチギボウシは水が多過ぎるのか、芽生えは見せても花をつけることが少なかったが、この二、三年、まともに筒状の花を横向きにつけるようになった。

これらの濃紫、淡紫色の花たちの咲くころは、すでにそこまで秋が来ているのである。この季節に美しく花咲くのは、その姿が自然の真実を示してくれることを意味するものだ。

それは、巧まざるドラマである。

4

ミズゴケを主体とする高層湿原は、劣悪貧困な条件しか備えていないというべきだろう。

素人の目で見分けがつくのは、オオミズゴケのブルトとスギゴケのブルトくらいのものである。

スギゴケは、蘚類の代表といってよいだろう。本州方面では高い山だけに見られるから、普通のものではないようだ。

雄株と雌株が一つのブルトをつくっている。陰花植物という印象は暗く、じめじめしたというのが普通だが、釧路湿原で出会う場合は、それとは全く逆で、明るい感じである。特にいっせいに揃ってのびる蒴の

集まりは、繊細で宗教的な敬虔さにあふれている。蒴はやがてふたがとれて胞子を風に乗せて散らしてしまう。そういうマジシャン的な巧みさは、神々から与えられた特技なのである。雄株の茎の頂きに雄性の器官がつく。これは雄花で黄色い星屑をちりばめたように見える。

スギゴケのブルトは、緑のじゅうたんの緩やかなもり上がりである。その群を少し開いてみると、下部は茶褐色の枝が密度濃く集まっているのがわかる。

スギゴケのブルトを温床にして茂っているのは、ホロムイツツジ、エゾイソツツジ、ガンコウラン、ヒメシャクナゲ、ヤチヤナギが主のようである。

ホロムイツツジの花は薄紙で作ったようなもろさを感じさせる。他の低潅木にさきがけて、壺状の花冠を一方にかたよらせて咲かせる。これは湿原のランプである。葉はいつも乾燥しているような虚無的な姿態を見せている。

エゾイソツツジの満開は六月中旬、半球形に白い小花を集めている。それは偽善の入りこむ隙き間のない緻密さである。小花は径八ミリほどで、全開しないのが憎らしい。この一枝を日本髪の少女が髪に挿すとよく似合うのではないかと、ほほえましい連想が湧く。

ガンコウランはほふく性の小潅木。球形の冬芽は四月になると葉腋に花をつける。花といっても雑居性が両性で、顕微鏡的といってよいほど細い花弁が踊るようについている。この花は早い季節に咲くので、釧路湿原で、「今年もよろしく」といいたげに、私は会いに行くのである。

最近、エゾイソツツジ、ガンコウランやヒメシャクナゲが盗採されている。スギゴケのブルトが無残に崩され、削られているのを見ることが多くなったのには、激しい怒りを覚える。そしてその人たちの心の貧しさを、どうののしってやったら気がすむだろうかとさえ思う。

ヤチヤナギはエゾヤマモモの別名があるが、といってモモの感じは少しもない。これも花期は早い。雌雄異株で、花穂は前年の葉腋の上につく。二センチほどの楕円形である。雌雄いずれも花穂には植物的な感じをもてない。甲羅をつけた爬虫類を連想させる。自然の神々はどうしてこんな悪ふざけをするのであろうかと、私はあきれているのである。

ミズゴケのブルトの主体はオオミズゴケのようである。水をたっぷり吸いこんだ海綿のようにふくれている。生きていることを疑いたくなるように、黄色っぽくなったり、紅紫色に染まるものもある。葉は葉緑素をふくむ小さな細胞と無色の大型の細胞からなり、その大型の細胞に穴があいていて、この穴から水を吸いこむという芸の細かさのあることを、私は最近、ようやく知った。

貧栄養のミズゴケは湿原の植物の母胎であり、温床であるという点では、敬意を表して来たし、これからもその敬意を消滅することはないと、いつでも私は彼らにいっている。

ウメバチソウ、ツマトリソウ、トキソウやサワランなども、ここに生えている。

ヒメシャクナゲの花冠は壺状で淡紅色。陽気なお嬢さんといっておこう。ミズゴケの中を斜めに抜けて花をつける。貧困と非情な環境を少しも恨むことはない。むしろそこだけが安住のブルトだといいたげであるのが、いじらしいのである。

トキソウとサワランは、湿原の姉妹である。双生児といってもよいのである。湿原がいかに凶暴かつ冷酷であろうとも、そこで楽し気に生きている。その秘めた強さを表現して、淡紅色の花が咲いている。唇弁が三つに裂けたトキソウ。同じく三つに裂けてはいるが、洋服のフリルのような飾りのあるのがサワラン。ともに一茎一花であることも、気品を感じさせる。

この姉妹は鉄錆のような湿原の水のかお

りのするミズゴケのブルトで、湿原のための讃美歌を合唱しているのだ。

ウメバチソウはひょろひょろと伸びているので、ひ弱な印象である。しかし子房の大きい白色の五弁花は、シンの強さをもの語っている。

この花の季節はエゾキスゲの黄色とワタスゲの白い絮の季節でもある。釧路湿原の中心部ではエゾキスゲはほとんど見ることはないが、ワタスゲの大群落は爽情をかきたてるのである。ヒメワタスゲ、サギスゲの群落も同じ風情である。量感のある湿原の抒情である。この群落の中でクロミノウグイスカグラを見ることがある。

5

小さな池沼がある。釧路湿原にあるそのすべてを確認することは至難である。そのいくつかを探索する楽しみは大きい。それは食虫植物に会うことができるからだ。

池沼の畔の泥炭層やスギゴケのブルトにモウセンゴケが生えている。

赤い腺毛に粘液が光っている。陽ざしが強くなればなるほど、かえって、輝きを増す。それは美しい七色の反射光だという。それに虫が簡単に誘惑される。「太陽の露滴」という愛称を頂いていることもうれしい。虫がとまると粘液は強く噴き出す。虫がもがけば腺毛の動きも激しくなる。粘液はいつの間にか酸性の消化液に変化する。それは殺戮である。残酷といえば、たしかに残酷。花は小さなウメのような五弁花で白色。花言葉は「セレナーデ」。

ナガバモウセンゴケやサジバモウセンゴケを探がしているが、まだ見つからない。このドロセラの仲間はどういうわけか魅力がある。

コタヌキモは池沼の浅い水面を覆っている。タヌキモ属は水生植物で、根を持たない妖術使いである。根なし草の強烈な生命力がある。小さな皮袋状の捕虫嚢をもっている。水面近くまで浮上している。緑の枝葉は細かく、裂けて無気味にひろがっている。

花茎は七月になって水面から数センチ突き出て、黄色い仮面状の花をつける。それはロートレックの描く「あいさつするイヴェット・ギルベール」の顔を連想させる。ロートレックがデフォルマシオンの天才といわれているように、コタヌキモは食虫植物の仲間で最もすぐれたデフォルマシオンの妖術使いであると、烙印をおしたいのである。

小さな浅い池沼を埋めつくすように黄色い花が咲いているのは、非常に精巧な吸収器官をかくすための一つの擬装ではないかと思うのである。

ムラサキミミカキグサはタヌキモ科、ミミカキグサ属(ストモイズイア属)の一つ。原産地はアジア、アメリカの熱帯、アフリカ、オーストラリア。タヌキモ科の捕虫嚢は、ミミカキグサから進歩したものだという。

ヘラ状の葉を一見だらしなくひろげ、そこにつけた小さな捕虫嚢で土中の微生物を捕えるワナ型、吸込み式である。釧路湿原には、ムラサキミミカキグサしか自生しない。この風変りな名は、二株のガク片が、果実を包んだときの形を表現したものだという。

湿原の泥地を占拠して一〇センチほどの花茎をのばし、淡紫色の小さな花をつけている。それは一つの夢の世界の存在を示すようだ。もともと熱帯性のものなのだが、どうして釧路湿原へ入りこんで来たのであろうか。おそらく、ここが北限ではないかとの素人考えをもっている。

この貧弱な小花たちに質問をしても、彼女たちは答えてはくれない。それはそれでよいのである。この原始的な植物に興味を抱くのは、答を求めようとしているからではないのである。

(釧路市文学団体協議会会長)

ムラサキミミカキグサ